

---

# Lily and Rose ~ 二つの百合と一輪の薔薇 ~

高坂桐乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Lily and Rose ～二つの百合と一輪の薔薇～

### 【Nコード】

N3589D

### 【作者名】

高坂桐乃

### 【あらすじ】

「もうすぐ、人間の世が終わる」一人の天才博士が国立研究所でそう呟いた。

## 始まりの開花式

「もうすぐ、人間の世が終わる」

一人の天才博士が国立研究所でそう呟いた。

世は、人間の黄金時代が終わりを告げる直前の事。

殆どの人々がその事実を知らずに日常を送っている中、

東京の只中で繰り広げられる謎の盗難。

数々の豪邸から宝石から盗まれ、

盗まれた後には一枚のカードと白い百合の花びら。

「二つの百合が散る夜に、一輪の薔薇が咲く」

学校へ来る謎の転校生、大きく見出しが出た新聞、周りで起こって  
いく怪奇・・・・・・・・・・

謎の笑みを浮かべる怪盗、

其れを追う一人の少女

二つの百合が散る夜に、一輪の薔薇が咲く

## 第1話

ある日の真夜中の事だった。

新宿に建つ洋風の豪邸は月光に照らされ、大きな黒い影を地面に落としていた。眠りにひっそり静まりかえる館。

だが、全て締め切っている筈の窓は、一つだけ開いていた。二階の、一番左側の部屋。

その窓から部屋へ差し込む月光は、其処にくっきりと一つの人影を映し出していた。

ガチャリ

人影は金庫のダイヤルを回した。ロックされたのを確認すると、すっと立ち上がった。その手には、紺の宝石箱のような物が握られている。

「リーフ邸の情熱の宝石、確かに頂いた」

声からしておそらく女性。彼女は口元に小さな笑みを浮かべて、窓に右足を掛けた。

そして足に重心を掛け、外へ身を飛ばした。

月明かりの中で彼女は宙に浮いた。白いタキシード、白いマント、白いブーツ。全てを白く包んだ彼女は地面に軽く足を着いた。

彼女が去った後の部屋。其処には床に散らばった白い百合の花びら、そして金庫の扉の隙間に差し込まれた一枚のカード。

「二つの百合が散る夜に、一輪の薔薇が咲く。

情熱の宝石は確かに頂戴した」

彼女の姿はもう、豪邸の前にはない。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \*

「おはよう、百合亜」

「おはよう、香」

いつもどおりの朝。校門で挨拶を交わした二人の女子中学生は下駄箱から上履きを取り出した。

「はあーっ、今日で静物画、完成させなくちゃならないんだよね」

「あ、香は美術苦手だったね」

「もう最低。私まだ林檎も塗り終わってないよー」

「ま、てきとうにばばーっをやっちゃえばいいよ。美術の成績なんて進学に関係ないよ？芸大にでも行かない限り」

「嫌そうなんだけどさあ……てきとうにやれないわ、私。それやっちゃうと評価が最低値になるから」

「あー……」

香の一言で百合亜は言葉を失った。

ちょうど教室に着いたので、百合亜は溜息をつきながら自分の机の上に重い学生鞆をどさりと置く。

「花崎先輩！」

その声で百合亜の体は凍りついた。あの声、ああ、あの声は。

「櫻木さん・・・・・・・・今日は何のご用件？」

「いつも通りです！」

遠慮なく窓際にある百合亜の机まで教室に入り込んできた彼女の後輩、櫻木悠里。

ちなみにいつも通りというのは、百合亜の髪のことである。

「先輩、今日も忍結びですねっ！」

忍結び、それは勝手に彼女がつけた百合亜の髪型の事である。

百合亜の髪は腰を越して足の膝頭まで届いていた。それゆえ、赤いリボン状のような木綿の布で首元から腰までの髪の部分をぐるぐる巻いている。

それがまるで忍者みたいだから忍結びらしい。最も、忍者はこんな髪型はしてないと思うのだが。

「では、失礼致しましたっっ」

来たときと同じく、悠里はガラガラと扉を開け、ガラガラと扉を閉めて自分の教室に帰っていった。

また待ち伏せしてたのか。今日は随分タイミングがよい。

百合亜は二度目の溜息をついた。そして鞆から机の中へ教科書を詰め込んでいく。

「あ・・・・・・・・・・弁当」

そこで百合亜は弁当がない事に気付いた。仕方ない、購買部で買お

う。

彼女は一人で教室を出た。スキップで購買部の方に行く。重い鞆を背負って歩いていたら直後は随分身が軽く感じられるのだ。

彼女は購買部でアンパンとメロンパンを注文した後、またスキップで帰っていった。

其処までは、いつもと同じ筈だった。中学に入学してから同じ、日常の日々。

それは、彼女が自分の教室の扉を開いたその瞬間から変わった。

「ビッグニュース！ビッグニュース！」

彼女の後ろから校則違反で廊下を走ってきた少年が教室に駆け込もうとして、百合亜の背中に激突した。

二人は同時に反対方向に倒れた。



## 第2話

「いったあ……」

百合亜は腰を抑えながら立ち上がった。そして、突進してきた少年を睨んだ。

「銀哉。校則違反で現行犯逮捕」

「校則に違反しても逮捕されないもんねーっ」

ぺろりと少年は赤い舌を見せて起き上がった。

彼の名は、梶野銀哉。百合亜の幼馴染だ。

「百合亜、大丈夫？」

「大ジヨブよ。ヘーキ、平気！」

別の扉に近い席の香が百合亜の所へ走ってきた。そして、銀哉に大げさな注意をする。

「梶野、そんな年で校則違反してると、社会人になったらとんだ大犯罪者になるじゃない。反省しなさい！反省の言葉は？嘘の言葉じゃ駄目よ？嘘ついたら大泥棒になるでしょうが！」

まるで小さい子供に言い聞かせるような香の説教で本当に子供のように（実際まだ成人していないのだが）縮こまっていた銀哉は、最後の言葉を聞いた途端、何か急に目覚めたように声を張り上げた。

「そつだ！泥棒！ビツクニュースなんだよ、本当に！ほらほら、見てみるよ！」

銀哉は、補助鞆から新聞を取り出し、広げて見せた。何故学校に新聞を持ち出してくるか。図書館にストックはある。だが、彼は最新マスコミ情報を常にチェックする変わり者なので、ストックなんか役立たずなのである。

百合亜と香は新聞の文面を覗き込む。

「ふーん、大臣が多額の借金を友人から借りて、友人がそいつを脅して自分を大臣に上がらせたって言う異例の事件ねえ」

香が興味なさげに見出しを読み上げる。「え？」といった銀哉は文面を覗き込み、「違う違う、これじゃなくて」と大きな新聞の紙を何枚もめくった。

別に紙の隅っこをばらばらめくってみて開けばいいものを。百合亜は横目で一生懸命文面をめくる銀哉を見ていた。

いつから持っていたのか、香は自動販売機で買ったココアをストロークからぐいぐい飲んでいた。好物のココアに涎を垂らしそうな百合亜は「あつた！」の銀哉の歓喜の声でちらりと文面を見た。

「『豪邸の家宝盗まれる。手がかりは百合の花びらと一枚のカードのみ』。『今日早朝、新宿区のリーフ邸で今は亡きミスターリーフの元妻、リーフ未亡人が主人の部屋の金庫の中に嚴重に保管されていた家宝が噴出されているのを発見し、すぐさま百十番通報。警察が駆けつけてリーフ邸をくまなく搜索して見た所、現場に残された百合の花びらと一枚のカードしか収獲はなかった。現場の床に散らばった白い花びらと、金庫の扉に挟まっていた一枚のカード。未亡人も、このカードが扉に挟まっていたのを見て金庫を開けたのだという。カードに綴られた内容は、『二つの百合が散る夜に、一輪の

薔薇が咲く」という、極めて謎に包まれた言葉である。警察は、単なる捜査の攪乱を起こすためのものとしてこれら进行处理し、犯人は窓から忍び寄ってきたものと判断した』。どう？随分興味深くない？」

今まで銀哉のマスコミ情報話には上の空で聞いていた百合亜と香も、この話は熱心に聞き入っていた。いや、教室中がこの話に聞き入っている。

「凄いよな！今の時代になんかこう、謎めいたこんなカード送ってくる奴なんてさ！いや、送るとは言わないか……でもなんか、怪盗みたいじゃん？怪盗ルパン！そしてそれを捜し求める名探偵シャーロック・ホームズみたいな人がいないかな？」

銀哉は二人を交互に眺める。

「うん………なんか、滅茶苦茶凄い。しかもその怪盗ってさ、部屋に百合の花びら散らばせる余裕まであったってことでしょ？それって凄くない？ねえ、百合亜もそう思うでしょ？」

「ふえ！？え、いや、あの、うん、そう、そうだよね！」

香の意気込みに乗せられて、百合亜はごまかし笑いをした。

その時、ちょうど本鈴がなった。そこで百合亜はすることに気付いた。

「銀哉………あんだ、予鈴遅刻だ」

「え？嘘？もう予鈴鳴ってた！？」

「出席簿にそう付けとくわ。でもこれで銀哉、百回目の予鈴遅刻ね。記録に残らないとはいえ、これじゃ赤坂も黙ってるわけないわよね。」

赤坂とは、百合亜達の担任である。そして、今日は百合亜が週番の日であった。

「うー……百合亜、堪忍！」

「どうしよっかな？」

「えー……帰りに百合亜の大好物なバナナパフェ一杯おごるから！」

「うーん」

「あーもう……それにプラスアルファでストロベリーキャラメルコーン！」

「オーライ」

果たしてこんな事で週番の仕事は務まるのか。それは誰も知らない。

「まあでも、一時間目の準備しなきゃさすがにばれるよ。」

嫌味ったらしい香の一言で銀哉はあたふたと自分の机に走っていった。

百合亜と香はくすくす笑いあいながら、自分の席に戻った。ちょうどその時、教室に赤坂が入ってきた。

## 第2話（後書き）

再構成しました。

1 ページ 1 ページの文字数を 6 0 0 0 ぐらい      1 5 0 0 前後に増やしましたのでまた最初からです。

1 日 1 ページは更新したいと思うので宜しくお願いします。

### 第3話

「起立。きょうつけ。礼」

百合亜はやる気なさに号令を掛ける。一時間目、赤坂の数学。

それと思うだけで嫌なのだが、きょうは銀哉の持ってきたビッグニユースで考えがそっちに行ってしまったているせいもあって、さらに感情がこもってない声である。

だが、それに構わず赤坂は元氣よく挨拶する。

「おはよう、3-Cの皆さん！今日も欠席はいませんね、週番？」

「はい」

こんな調子だから赤坂は苦手なのだ。

しかもそれが担任だとすると………ちょっと吐き気がする。

まあ、この学校の先生はほとんど生徒達の好みではない。

全て勉強そっちのけで「遊んでいいぞ！」なんていう先生がいたら話は別だが。

「それで一時間目は代数だ………二次関数の続きに入る前に、このクラスに転校生がいます！さあ、入ってきて下さい！」

ぱちぱちぱちと赤坂は拍手する。生徒達はやる気なさに拍手をした。というより、手を叩くという方が正しいか。

それはさておき、扉がガラガラと開いた。女子生徒達がキャーキャー言い始めた。男子生徒も、女子までとは言わないが、がやがやし始めた。

「皆さんお静かに！この人は、今日から皆さんと共にこの教室で暮らす夢宮静貴君です！」

「初めまして。夢宮静貴と申します。これからどうぞよろしく願いいいたします」

静貴が頭を下げる。女子が騒ぐのは、彼が上品なイケ面の顔立ちだったからが一つの理由だが、男子と共通して騒いだ理由はもう一つある。

彼の髪は長く淡い水色の髪なのだ。長いといっても、百合亜程ではないが、肩まである。女子でも長い方だ。

「静かに、静かに！ええ、彼の髪は染ではないですよ？あくまで地です。だから皆さん、これをきっかけに染なんてやらないで下さいね」

「……先生の言う事なんて誰が聞くか。これをきっかけに見初める奴急増するだろうな……いっそ黒く染めてくれば目立つ事なかったのに。百合亜は頭の中でぶつぶつ呟いた。

「それじゃあ……夢宮君はあの席に座って貰いましょうか」

「はい」

赤坂が指差したのは、銀哉の隣に空いている席。うわ、夢宮君の近く！？キヤー、どうしよう、私！早くも近辺の席に座っている女子生徒たちは騒ぎ出す。あほくせえ、と男子生徒たちはもう熱が冷めたように近付いてくる静貴に目もくれようとしない。

銀哉の隣に腰掛けた静貴は隣の銀哉にっこりと微笑んだ。

「初めまして、夢宮です。いろいろ迷惑かける事があるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします」

「あ……………どうも」

もし彼が女子生徒のミニスカ制服着ていても別段違和感がないくらい、彼はおんなぽかった。

オトコオンナ、オカマ。百合亜の頭の中にそんな言葉が浮かんでは消えた。

女々しい、とどこかで男子生徒が呟く。百合亜はこくりと頷いた。正しい、その言葉。

「それじゃ、授業を始めますよ。えーと、今回はグラフの説明をした所で終わっただんですね。では、今日は……………」

赤坂が白いチョークを握り、黒板になにやら書き始めた。だがそれを板所に書き写すなんて面倒くさい事は誰もしない。

もうすでに眠りこけている阿呆がいる。銀哉だ。

だが、居眠りの常連に赤坂はちらりとそのぼさぼさ頭を見ただけで、チョークを投げつけも怒鳴りもしない。

そうしても無意味だと分かっているからだ。

賢いよ、先生。今日も心の中で赤坂を褒め称えながら、百合亜はちらりと阿呆の隣にいる静貴を見る。

第一印象と同じく、静貴はパツチリ目を開けて真剣に黒板を見つめてはシャープペンシルをノートの上に走らせていた。

あー、きつと成績トップになるだろうな。

頭の隅っこでそんな事を考えながら百合亜は頬杖をついて窓の外の青空を見上げた。



## 第4話

「夢宮ーっ！御前何処の部活に入ったの？」

終礼が終わると銀哉の阿呆が教室中に聞こえるような大声出して静貴に聞いてきた。

「え？僕ですか？ええと・・・・・・・・弓道部です」

対する静貴は弱々しげな小声で答えた。銀哉の勢いに押されているようだ。

「弓道部！？俺と同じじゃん！わあゝ新入部員大歓迎ゝ夢宮、俺が案内するぜっ！」

「銀哉、あんた滅茶苦茶五月蠅い。うざすぎるよ」

香が銀哉の頭をこつんと拳で殴った。もちろん軽くである。彼女が本気で殴ると・・・・・・・・本当に痛い。

「痛い！堪忍してよ」

「まあ良いけど。百合亜あ、先帰ってるね」

「OK！グッドラック！」

生徒のざわめきの中をぐり抜けて百合亜は教室を出た。目指すは第四体育館。

ちなみに、百合亜の学校には体育館が五つある。第一、第二はバレ

一部がバスケット部が使い、第三は卓球部か柔道部、第四は剣道部、第五はプールで、水泳部が使う。  
だから、百合亜は剣道部である。

「ちわゝす！」

元気のよい挨拶をしながら百合亜は第四体育館の扉を開く。体育館といえど、第四は第一、第二、第五に比べ、随分小さい。第三と同じ位である。

ちなみに、五つの体育館は同じ建物の中にある。地下二階に第五、地下一階に第二、一階に第一、二階に第三と第四。

「おはようございます！」

後輩達が一斉に百合亜に向かって頭を下げる。その中には今朝彼女の教室に無断で入り込んできた櫻木悠里もいる。

言い忘れたが、百合亜の学校は中高一貫だ。だが、高校生は殆どなると同時に部活を引退する。勉強が忙しすぎるのである。

だから高校生の先輩は殆どいない。いるのは、百合亜と長い付き合いの龍崎嘉樹と、有馬修、田木レイのみ。

「じゃあ、班分けをするから、二列に並べ。えーと、右の列、前から五人が一班、左も前から五人が二班。残りが三班だ。一班に俺、二班に有馬、三班に田木だ。まず手始めから」

部長の龍崎がてきばきと指示を下した。百合亜は二班、有馬と悠里がいる班だった。

「先輩、今度こそは勝ちましょう！」

意気込み語る悠里。ちなみに、前回の対抗の時も二人は同じ班で、  
ぶりっけつだった。

十八人いる剣道部の部員の中で三班に分かれ、それぞれ対抗する。  
勿論一人ずつ。

二つの班が対抗している時、残る一つの班は練習したり、審判をし  
たりする。審判は、主審、副審、得点の三人。

先に一班と二班が対抗する事になった。最初に出たのは百合亜。相  
手は、彼女と同学年で、部の中でもずば抜けている鷹川翔夜。

御面の隙間から、百合亜はじつと相手を睨んでいた。相手の方が実  
力上なのだ。油断を見せてはならない。木刀を握る手に汗が滲む。  
試合開始の号令が主審から出される。百合亜はそつと右に歩む。対  
する翔夜は全く動かない。御面の隙間から、目を閉じいたって冷静  
な彼の表情が伺えた。

木刀を振り上げた。彼はゆっくり目を開け、百合亜の攻撃を防ぐ。  
そしてそれを跳ね返した。

百合亜は神経を逆立てて、体勢を崩すのを防いだ。真正面から、胸  
もとめがけて突進する。

一瞬、翔夜が目をきつと見開くのが、百合亜に見えた。次の瞬間、  
彼女の手から木刀が離れて宙を飛び、首下にもう一本の木刀の刃が  
触れていた。

其処まで、と主審が声を上げる。百合亜は歯を食い縛りながら御面  
を外した。

また負けた。この前も、その前も、ずっと負け続けていた。彼女が  
彼に勝った事など、一度もない。

短い時間で試合を切り上げるため、一つに付き一本しかない。今日  
はこれで百合亜と翔夜の対戦は終わった。

結果、二班は三対二で一班に勝った。悠里も有馬も好調だった。

今日の所は一班が優勝した。百合亜は、二度目の試合では相手を負  
かしたけれども、やはりいつもと同じく、どこか吹っ切れない所が  
あった。

そして、そのまま百合亜は家路についた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3589d/>

---

Lily and Rose ～二つの百合と一輪の薔薇～

2010年10月28日03時11分発行